

# 総合教育会議記録

1. 日 時 令和2年1月29日(水) 午後4時00分 開会  
午後5時20分 閉会

2. 場 所 本庁舎 5階第3委員会室

3. 出席者 横手市長 高橋 大  
横手市教育委員会  
教育長 伊藤 孝俊  
教育長職務代理者 二階堂 衛  
教育委員 加賀谷長吉  
教育委員 今仲 和代  
教育委員 佐々木雅子

4. 説明のため出席した者(11名)

総務企画部次長兼総務課長	佐藤 信
教育総務部長	栗田 律子
教育総務部次長兼教育総務課長	木村 雅美
文化財保護課長	上法 満
図書館課長	佐藤 輝明
生涯学習課長	森田 博範
スポーツ振興課長	加藤 貞純
教育指導部長	木村 司
教育指導課長	岩野 玲子
学校教育課長	遠藤 美紀子
学校給食課長	田代 久和

5. 事務局 総務課文書法規係長 嶋田 貴  
教育総務課教育総務係長 宮本 敦

6. 会議に付した事件

- (1) 令和2年度教育行政方針(案)について
- (2) その他

7. 会議の経過と結果

開 会 午後4時00分

## ●栗田教育総務部長

ただ今から令和元年度第1回横手市総合教育会議を開会する。本日の進行は教育委員会教育総務部長が担当するのでよろしくお願いする。

横手市総合教育会議は平成27年5月25日に設置されたもので、毎年度1回会議を開催しており、今回が5回目となる。この会議は市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、地域の教育課題やあるべき姿を共有して、より一層民意を反映した教育行政の推進を図ることを目的としており、昨年度からは新年度の教育行政方針を作成するこの時期に開催している。本日は、令和2年度に教育委員会が取り組む事業を中心に意見交換をさせていただきたいのでよろしくお願いする。

はじめに高橋市長と伊藤教育長からご挨拶をいただく。

## ●高橋市長

このとおりの天候で、全く雪がない景色が続いている。昨今、極端な天候が続いているので、3月や4月にイレギュラーな降雪がないか心配している。

教育行政に推進にあたっては、伊藤教育長を始め教育委員の皆様、教育委員会の事務部局の皆様と私ども市当局との連携を強固にしながら進めてきた。そういった連携に感謝を申し上げるとともに、次代を担う子どもたちはもちろん、横手市民1人1人の人間的な力を増していくためにも教育の力は重要であると捉えているので、今後も引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。

昨今、ICT、IoT、AIといったテクノロジーがどんどん進化を遂げている。そういった現実を踏まえながらも、この時代をどうやって生きていくかということには難しい問題をはらんでいる。これからの子どもたちが自信をもって成長していくための道しるべを我々大人が示していかなければならない。皆様方のご尽力があつての教育行政の推進であるので、今後も何卒よろしくお願いを申し上げます。

## ●伊藤教育長

来年度予算の市長査定も無事に終了し、一定の数字が出てきた。以前から市長には教育委員会の事業に理解をいただき、予算的な部分にも配慮をいただいている。横手市を視察に訪れた方々は、どなたも当市の教育環境の良さに驚いてお帰りになっている。それを当たり前と思わずに、現代的な課題には全市を挙げて果敢に挑戦しつつも、これまで培ってきた伝統的な良さを守りながら今後も取り組んでいきたい。最も大事にしたいのは、学校間格差や地域間格差が教育の中で生じてはいけないということだと思っている。市全体でさまざまな事柄に挑戦できる教育環境については、市教委としてはこれを全力を挙げてバックアップしていきたい。市当局からは大変な配慮を協力をいただきながらの教育行政なので、市長からの様々な要請にも応えつつ令和2年度も頑張っていきたい。本日はよろしくお願いする。

### (1) 令和2年度教育行政方針(案)について

〔説明〕

## ●木村教育総務部次長兼教育総務課長

この資料は令和2年度に横手市教育委員会が取り組む事業についての展望をまとめ、政策会議を経て市議会3月定例会への提出を予定している内容となっている。

【以下、[議題（１）資料]を基に説明】

●栗田教育総務部長

令和２年度事業の重点となる部分について教育長から説明をいただく。

●伊藤教育長

今年度作成した教育行政方針については、これまで羅列的に事業を盛り込み、ページ数を多くとっていたものを大幅にカットし、とりわけ中心的に取り扱う部分をまとめている。もしかしたら言葉足らずに感じられる部分もあるかもしれないが、わかりやすく重点項目が伝わるように作成している。今回は、とりわけ市長に理解いただきたい部分についていくつか詳しく説明する。

言語活動の充実による学力向上推進事業については、開始からちょうど１０年が経過した。中学校区ごとに研究会を開催するという横手市独自の、全国的にも他に類を見ないこの取り組みについては２周目を迎えた。この１０年間で、合併時の地域間格差の解消と、市全体での目に見える形での点数の上昇は間違いなく生じている。今年の県の調査においても県平均を遥かに超えており、そういった意味でも大きな成果があがっている。その要因は、やはり研究会が毎年行われてきたということが大きな追い風になっているものと思われる。児童・生徒の点数的な学力が向上したということと同時に、ここ１０年で最も大きく変わったのが、地域性や特色に合わせて各学校でバラバラに行われていた教育への取り組みが「市全体の取り組み」という意識に変化することによって、先生方が市全体で質を高めていこうという考え方になってきたことだと思っている。これまでは、各学校の単独の研究はその学校から教員が異動した時点で終了してしまい、転任先の学校ではまた一からやり直しという積み重ねとなっており、教員にとっても学校が変わるたびにキャリアが積み重ならず、常に一からの繰り返しという状況が長く続いていた。それが当市ではここ１０年で解消され、Ａ中学校からＢ中学校へ変わっても、Ａ中学校でのキャリアがそのまま生きて働いていくということになり、特段に予算をかけて研修会をしなくても日々の教育活動そのものが研修になっており、教員が集まればすぐに質の高い協議ができるという状況がこの１０年間で芽生えてきている。こういった状況については、視察に来られた方々も大変驚いてお帰りになっている。これについても市当局からの理解をいただいて予算を付けてもらっての事業なので、新しい学習指導要領が来年から始まるが、横手の場合は微塵も揺るがず、これまで積み上げてきたものについて更に質を高めるための努力をするということで、引き続きこの事業を推進していきたい。

外国語活動についても、市長の後押しもあって２年ほどかけてＡＬＴの増員を図っている。また、プログラミング教育については学校間格差が出やすい部分なので、市教委で一定の年間計画を作成した。これを基に各学校で具体化していくというスタイルを構築したいと考えており、そのためのトイドローンの整備も併せて行いたい。

西かがやき教室を増やしてもらったが、これを継続しながら子どもたちの健全育成に努めてきた。南かがやき教室では年間１０００件を超える電話相談活動も行っており、必ずしも教室に来るだけではなく、幅広く相談活動を行ってもらっている。また、昨年から就学前教育を担当する指導主事を置いているが、今年は教育保育アドバイザーを含めて６０回を超える訪問数を数えている。今は、経済的なことについては子育て支援課、教育内容については

教育指導課の指導主事やアドバイザーを各保育園や幼稚園が頼っている状況にある。各保育園や幼稚園は、これまで経営の悩みは市に相談できても、教育の質に関する相談はなかなかできなかったので大変喜んでもらっており、今では気軽に相談が入る状況となっている。今後、更に0～5歳児の教育の質を上げることにより、小中の教育のレベル向上に影響があるものと思っている。

I C T環境の整備については、この12月に突然G I G Aスクール構想が発表され、この整備と端末導入については今のところ秋田市と横手市が前向きに検討しているということで、他市についてはまだ形になっていない状況であり、新年度には明確な形にしていかなければならないと思っている。

学校給食については、とりわけ冬期間の地場産野菜の不足があるので、農林部と協力して冷凍の仕方を工夫して冬でも横手の野菜を食べられるような実験を行っている。これがうまく機能するとこれまで以上に地場産品の給食での利用が増えるものと期待している。給食センターについては、横手給食センターのように民間委託を検討しており、ゆくゆくはセンターの統廃合も見据えながら今後計画を進めていく必要があると考えており、その際には改めて相談を申し上げる。

スポーツ振興については2020東京オリンピックが全てだろうと思うし、市当局と協議しながら体育施設の整備については一定の方向性を出したいと思っている。生涯学習については、コーディネーター配置の拡大を進める。コミュニティスクールについては、現在は学校が一方的に地域に声をかけて学校が中心となって活動を行う形となっており、学校にとっては難儀なものとなっているが、横手では地区交流センター化の取り組みなどもあるので、地域から学校に声をかけていくようなスタイルにして、学校が必要以上に苦勞しなくてもいいような横手版のコミュニティスクールにできないか相談しており、国県がいうコミュニティスクールではない形を模索している。

図書館については、駅前の図書館機能の整備について一定の努力をしていく。文化財については、金沢柵を発見するためにより丁寧に深く広く掘って市民の皆さんに喜んでもらえるように頑張りたい。主なところについては以上となる。

## 〔質疑〕

### ●今仲教育委員

資料5ページの「横手市いじめ防止等対策モデル事業」で、増田中学校区で地区の特色を生かした取組みを展開するとあるが、増田の地区の特色とはどのようなものか。

### ●岩野教育指導課長

毎年度、中学校区をローテーションしながらモデル推進校区をお願いしているものであり、小中合同で連携して内容を決めている。学校生活においていじめのない日常を自分たちで作っていかうとする気持ちを高めるために取り組んでもらっている。増田中学校区においてもこれから相談して内容を決めていくことになる。

### ●二階堂教育委員

この点について、地区の特色という記載はわかりづらいと思う。学校区の特色としたほうがよいのではないか。

●伊藤教育長

増田の場合は「蔵」とか「マンガ」など、市で進めている観光に絡めていくことになると思う。他の中学校区では「地区の特色」と言ってもなかなか出てこないが、増田の場合は特色が鮮烈なので、こういった機会に小中で何か新しいことを取り上げてもらいたいという思いはある。

●二階堂教育委員

それが「いじめ防止」とどのようにつながるのか。

●伊藤教育長

いじめをしないように、という話だけではなくて、小中の子どもたちの交流の中で小学生を中学生が理解し、中学生が小学生を理解するというように人間関係が豊かになり、いじめが解消されていくだろうという考え方だと思っている。必ずしも「いじめ反対！」という運動化するものではない。地区を巻き込んだ広がりを目指している。

●加賀谷教育委員

ということは、これが横手版のコミュニティスクールにつながっていくということか。

●伊藤教育長

一気にそこまで行くのは難しいが、そういう意味の活動を目指している。増田では地区交流センター事業が進んでいるので。

●加賀谷教育委員

学習指導要領が変わるということは、これまで横手市が行ってきたことに加えて何が新しくできるのか、何をどういうふうに学んでいくのかについて教えてもらいたい。

●伊藤教育長

教育行政方針には「生きる力」の育成を継承しつつ、新しい時代に求められる資質・能力を身に付けた子供の育成を目指し…」と記載している。これまで求められていたのは「今の中学生としてどんな力が必要なのか」というスタンスであったが、新しい学習指導要領ではもう一步深めて「将来どういう人間になるためにはどんな力が必要か」ということが問われている。社会人としてしっかり生きていくために大人として必要な資質や能力は何か、ということが学校に求められている。これをどういう学習から身に付けるのかというと、社会一般で解決が難しいような課題を学校の学習に取り入れ、子どもたち自身の興味や話し合いの中で課題を解決していくことによって資質や能力が育つことが考えられている。これまで10年間かけて横手市が目指して来たのは「言葉の力をしっかり付けながら話し合い活動の中で自分で答えを見つけ出す」という授業のあり方であるが、これは新しい学習指導要領が求めるものと実は大きく変わらない。教育行政方針に「主体的・対話的で深い学びの実現」と記載してあるが、主体的・対話的というのはこれまで横手の研究会で大いに頑張ってきたところであり、話し合いとか前向きに課題を解決する力という部分は一定程度の域に達しているものと思われる。「この1時間で自分の何が変わったのか、どんな力がついたのか、次にどんなことを考えたいのか」というあたりまでの、いわゆる「深い学び」という世界をどの子にも持たせたいと思っており、そこが市としての課題だと捉えている。横手北中学校区では深い学びを実現するためにどのような話し合いのさせ方や表現の仕方が必要か、「表現」に注目しながら授業改善をしようとしている。ざっくり言うとこのような所となる。これにプラ

スして、ICTを活用しながら個々の能力の違いをなくしていく、個々の状況に応じたメニューをAIによって提供するといった方向性も必要だろうということでGIGAスクール構想が出てきたような状況となっている。

●加賀谷教育委員

教育長はよく「大人になった時のために」という表現をされているが、他者との協働という部分で、少し考え方が古いかもしれないが、学校は「忍耐」とか「耐えながらみんなで一緒にやっていく」ということを学んでいく場ではないかと思っている。学校時代よりも大人になってからの苦勞の方が図り知れないものがある。それが今の学校からは抜けているのではないか。

●伊藤教育長

今の社会は個人主義が拡大しすぎて「自分さえよければ」という面での問題が多い。また、日本人が海外へ行った時に外国人と対等に渡り合えないということについては、単に英語が話せないということだけではなく、他者との関係性を構築する力がない、文化とか習慣の違いを超えて協同して行う力がない、ということが大きく取り上げられている。協同性とか折り合いをつけるといった能力が備わらないと、これからの日本人は地球規模での活動ができないだろう、というのが文科省の考え方となっている。

「耐える」とか「我慢する」ということについては市長もよく言われるが、それを無視しているのではなく、活動や他者との協同の中では忍耐や我慢も必要であり、学校生活全体の中で育てていかなければならないものだと思っている。

●加賀谷教育委員

いろいろな大会などを見に行き行って感じるのは「生徒と先生は友達ではない」ということ。その辺をもう少し毅然としていてほしいと思っている。

●栗田教育総務部長

先ほど二階堂委員から5ページの部分の言い回しについて意見をいただいたが、このままでよろしいか。

●二階堂教育委員

先ほどの教育長の説明で内容がよく分かったので、これでよろしいかと思う。

●栗田教育総務部長

他に何か意見等はないか。

●二階堂教育委員

13ページの「ヨコワン2019」の活用を進めていくという部分だが、「ヨコワン2020」という表現にはならないのか。昨年度のものを有効活用していくということなのだろうが、見ていくと何故2019なのかというように感じられる。

●佐藤図書館課長

ヨコワンは2018年度も作成し、今回は2回目の取り組みとなっている。2019を活かして更に発展的な内容につなげていきたいと考えている。

●伊藤教育長

これはそんなに毎年作成できるものではないので、単に「ヨコワン」とすれば足りるのではないか。

●栗田教育総務部長

それでは「2019」を削除する。他に何か意見等はないか。

●佐々木教育委員

9ページ下段の「オリンピック代表チームの事前合宿についても実現できるよう…」とあるが、あと3～4ヶ月しかないのにまだ決まっていないのか。

●加藤スポーツ振興課長

7～8割方は実現できるものと思っているが、今のところ期間等の詳細が決まっていないのでこのような表現にしている。

●佐々木教育委員

もう一点。学校訪問した際に言語活動が浸透してきており、どこの学校に行っても先生と子どもたち、それから子どもたち同士の会話でのやり取りをする授業が感動的でした。こうやって育ててもらっているんだなあ、言葉を大事にしてやっているんだなあということが思い知らされた。これと並行して子どもたち一人ひとりにタブレットやICT活用の能力をつけるとかそういったことが重なっていくことになるので、自分にとってはこれから小中学校がどのような景色になるのかわかりづらいつ感じている。同時に大変な世の中になると思っている。いま学校で行われている言語活動は本当に基本的なことだと思うので、これまでの成果でこのような授業になっているのだろうが、これをなくさないでもらいたいと願わずにはいられない。また、校長先生方の経営説明を聞くと、どの校長先生も「自立した社会人になるために」ということを言っている。この言葉を聞くと、保護者の立場としては「そこまで流れるように持って行ってもらっているんだな」ということがわかり、感謝する気持ちになった。

●伊藤教育長

今の横手で取り組んでいるような言語活動もなく、各学校の取り組みに任せっきりのような自治体の学校では、子どもたち自身が自分で言葉を使い分けることができない。そういった子どもに機械を与えると、おそらく機械の言うことしか聞かなくなる。これは大変危険な話で、結局はAIに洗脳されてしまうおそれがある。批判精神とか物事の判断力といった能力は話し合いをしたり友達との交流の中で育てていくべきものであり、機械に育てられるものではない。そこを明確に区別しながら、機械に頼るときは何が効果的なのかといったことを見極めながら進めていく必要があると思っている。ただ、機械のいいところは、答えを打ち込んでいくとその回答の状況を読み込んで、その子の足りない部分を補うための問題文が即座に出てきたりするので、そういうことが自由自在にできる。今までは1人の教員が全員の状況を見て即座に対応することは不可能だったので、全員に機械があれば教員はそれを観察するだけでいいことになる。そういう体制に適した学習内容であれば機械にお願いすることがあってもいいが、話し合いをしたりするような場面は機械にお願いするわけにはいかない。その子なりの生活体験で情報を判断したり評価したり比べたりするような部分は、これまで以上にしっかりと身に付けさせていかないと機械に左右される人間になってしまう。その区別をどうするかが問題となっている。

●高橋市長

大変まとまりのある教育行政方針だと思う。羅列されているようで全てがつながっており、

感心して読ませていただいた。子どもたちの育成は永遠に問われる課題だが、ICT、IoT、AIといったテクノロジーは現実世界に入り込んでいるので、子どもたちもその世界で生きていかなければならない。頭脳労働などはかなり駆逐されると言われているので、GIGAスクール構想は教職員の大量退職にもつながるかも知れない。インターネットの検索サイトは使っているうちに個人に応じてカスタマイズされていくので、同じサイトであっても見ている人によって表示が違う。これと同じように学校においても、その子が興味を持ちそうなアプローチをAIが提示して教育が行われていくことになるのだろう。人としての生きるあり方が問われることになる。

言語教育は社会性とかコミュニケーション能力を伸ばすことになると思うが、社会性やコミュニケーション能力が欠けているためにいじめられてしまう子もいるだろうし、相手の気持ちをつかむことができないためにいじめてしまう子もいるだろう。言語活動が昇華していけば、単純ないじめの構図は解消しやすくなるのではないかと思っている。学校は人工的に葛藤や衝突を生み出す場でない、社会に出てからそれに耐えられないという事態になってしまう。全てを包み込んで守ってしまうような教育には、自分自身は少し疑問を抱いている。自己管理や自分を正すという部分をそれぞれが持たないと、社会に出てから他人に管理される人間になってしまう。それでは自由がなくなってしまうので、自分で自分を厳しく管理できるような子になってもらいたいと期待している。

プログラミングについては、これからの世の中は原理が必要なもので、学ばなければならないものと思っている。機械は命令に対して文句を言わないし、疲れしないし、反発もしない。人間がやるべきことと機械がやるべきことの使い分けを子どものうちからわかっておくことが大事だと思っている。外国語教育についても、コミュニケーション能力に加えて教養とか文化度を身に付けていないと、大した人間でないことが外国の人に露呈してしまう。外国語を理解できるというツールと合わせて人間力や様々な教養を身に付ける必要があると思っているので、そういう授業を行っていることについては心強く感じている。

教職員の皆さんは大変な苦勞をされているとは思いますが、メンタルな部分もケアしていただきながら難しいかじ取りをお願いしたい。現場の職員の皆さんにもねぎらいの言葉をかけてもらいたい。

#### ●栗田教育総務部長

そろそろ時間となった。今日は皆様からいろいろな意見をいただき感謝を申し上げる。若干修正する部分があるが、再度チェックのうえ政策会議へ諮り、その後3月定例会にかけたいと思っている。令和2年度教育行政方針（案）についてご異議ないか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

ご異議がないようなので、この内容で議会で提出させていただく。

その他として事務局としては特に議題は用意していない。もしこの場で何かあれば発言をお願いします。

【「なし」と呼ぶ者あり】

本日は貴重なご意見を出していただき御礼申し上げます。他にご意見がないようなので、これで令和元年度第1回横手市総合教育会議を閉会する。

閉 会 午後5時20分